

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 針本正行編 『平安女流文学論攷』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 晴代, Takano, Haruyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000279

〔書評〕

針本正行編

『平安女流文学論攷』

高野晴代

本書は、永年國學院大學にて研究、教育に尽力され、現在学長の任にいらつしやる針本正行氏の古稀を記念して編まれた論集である。針本氏に指導を受けた研究者による17編の論文と1編の資料紹介で構成されている。

書名の『平安女流文学論攷』については、古稀記念論集編集委員会に拠る「序」に詳細に紹介されている。そこには、針本氏が用いられる「平安女流文学」が、白田甚五郎氏の『平安女流歌人』（1943）に由来すること、重ねて針本氏の著書『平安女流文学の研究』（1992）収載「平安女流文学の胎動」において、平安女流文学の発生を問うには、「平安女流文学」の定義をしなければならぬこと、平安時代に生まれた女流の文学という歴史的な定義は簡明であるが、内容よつて定義する

ことの難しさを指摘された点に触れ、こうした針本氏の平安女流文学とは何かを問うことは「日本文学史を問い直すことに繋がっていく」と記される。本書では、文学史、すなわち作品の「継承・発展」という意識に焦点を置き、論考の配列を「平安女流文学の発生、展開という流れ」に沿いつつ成立順という方針を選択されたことが表明されている。

この編集方針に鑑み、本稿は目次順に各論文を紹介していくこととする。

内野信子氏「『蜻蛉日記』の「ほととぎす」考」は、『蜻蛉日記』における16箇所「ほととぎす」表現の検討を通して、作品の進行にしたがつて変容する「ほととぎす」に、道綱母が、道綱の母、養女の母へと「われ」を取り戻していく過程を読み取る。

森野正弘氏「『枕草子』の鳥が切り拓くクロノトポス」は、『枕草子』の時代における規範としての『古今和歌集』の鳥の表現と『枕草子』の鳥の捉え方を比較検討し、清少納言が試みる空間を指摘、「時間」と「空間」との間の本質的な繋がりを示すクロノトポスの一例として捉え、そこに『枕草子』の独自の表現を見出している。

沼尻利通氏「『紫式部日記』の宮内庁書陵部黒川家旧蔵本と

「肥前松平文庫本」は、『紫式部日記』の本文研究である。ともに奥書のない出自が不明な本の補入箇所、傍記、傍注、仮名遣い等を検討、黒川本の下巻の問題点を明らかにし、黒川本について松平本を視野に入れての研究の必要性を指摘する。

太田敦子氏「『源氏物語』藤壺中宮の容貌^{かたち}」¹、死者に似ることをめぐって―は、藤壺の容貌について、桐壺巻の桐壺更衣（死者）に「似る」という表現を作品内で検討した上で、藤壺中宮の生き方までを類推し、桐壺帝の更衣「追慕の心を慰め」、源氏との「苛烈な宿世」を受け止める人物とする見方を提示する。

津島昭宏氏「母の影見ぬ光源氏―『源氏物語』の「かげ」をめぐって―」は、作品内の「かげ」という表現を対象に、「影」「御蔭」の諸相を検討、光源氏が人々の「御蔭」となる一方、光源氏自身は女の「影」を追い、藤壺の「影」は掴めない、というところに、「(神の子)としての揺らぎを見る」と指摘する。

竹内正彦氏「夕顔の袴の下紐―『夕顔』巻における四十九日の法要をめぐって―」は、四十九日に新調された装束の中から、光源氏が袴を選び、歌を詠んだ意味が問われ、夕顔物語の終末をどう捉えるかの問題意識が提示された。袴をつけることの意義について他作品も含めて分析がなされ、その意識にしたがって四十九日の法要における袴の新調により夕顔を彼岸に送る意図

が明らかになった。しかし、夕顔の魂はさまよい、夕顔物語は、光源氏のいるごのみの蹉跌を語って終わることが論証された。

岩原真代氏「『源氏物語』における利他の仏性―延齢・延命の表現をめぐって―」は、作品内の「延齢」「延命」の表現を分析し、作品の進行とともに、光源氏の「延命効果の影響範囲の狭窄化」が指摘され、「老」が語られる。第3部での形骸化と「狭衣物語」など平安後期への継承が指摘されている。

小菅あすか氏「『源氏物語』持経のように広げる手紙―「紅葉賀」巻における光源氏と藤壺との手紙表現―」は、「持経のように広げる手紙」を、平安文学中の「持経」、手紙を「広げる」意味などの視点から分析する。その上で藤壺の手紙表現を通して、仏教説話にみられた持経者のように、光源氏が藤壺に護られる存在であったことを指摘している。

浅尾広良氏「朱雀院行幸での「青海波」の舞」は、行幸当日の描写について、青表紙本と河内本との本文の相違を各本文から検討し、この場面の形成に際して、両本が准拠した事例の差の存在を明らかにした。特に帝の聖性という点、一方、光源氏の超人的魅力という点から「拮抗する緊張感」が見られ、河内本の意識的な強調が論証された。

高倉明樹子氏「源典侍と帝―『源氏物語』「紅葉賀」巻―う

らみても」の歌を視点として——は、紅葉賀卷「うらみても」に添えられた「底もあらはに」の語を対象に、帯が表すものについて、催馬楽「石川」を含めてその背景を検討し、帯を贈る意味から源内侍の光源氏への想いの存在を明らかにした。

笹川勲氏「『明石』卷末の冷泉帝」は、明石卷末の冷泉帝の描写が何を意味するか、「こよなくおよぶ」「御才」について分析し、冷泉帝が帝である点に差し障りのないものであることを指摘した。しかし、不義の子である負性は、明石卷末の表現だけでは覆えず、光源氏の冷泉帝の権威のために施策が行われたと結論づけた。

春日美穂氏「『源氏物語』冷泉帝の祈り——『薄雲』巻における「物のさとし」を始発として——」は、冷泉帝が不義の子であることを知ってから、祈らない帝になったことを分析し、「祈りたくても祈れない帝」とし、祈らぬことで、密通の罪を己の中に抱え込む冷泉帝の内面を映し出すものと結論づけた。

亀谷粧子氏「紫の上の「あぢきなき」思い——『源氏物語』「若菜下」巻における紫の上の発病をめぐって——」は、「若菜下」において病に倒れた紫の上の思いを「あぢきなし」と表すが、この語義及び『源氏物語』中の用例分析から、この「あぢきなし」が貴族社会に存在する苦悩や厭世観の表現であることを導

きだし、紫の上においても「愛執に苦悩する世界と光源氏を拒む」ものとした。しかし、紫の上は愛執から離れられず、出家が叶わなかったと指摘している。

吉海直人氏「『源氏物語』「臥しまろぶ」考——悲しみの身体表現——」は、「臥しまろぶ」及びその類似の表現「こいまろぶ」の用例をもとに、上代・『万葉集』では「こいまろぶ」の調査がなされ、次に『源氏物語』以前及び『源氏物語』自体、加えてそれ以降の「臥しまろぶ」の分析、さらに『今昔物語集』の用法を通して、原義としてのころげ回るといふ大げさな所作から、それを悲しみの所作だけでなく、対極の喜びや笑いまで用法を拡大したと考察している。「こいまろぶ」から「臥しまろぶ」への移り変わりや意味用法の広がりについて辞書が説明を加味するべきとの提言がなされた。

岡嶋偉久子氏「天理図書館蔵河内本源氏物語攷——中京大学図書館蔵大島本（河内本）との共通錯簡の存在——」は、ともに略称の「天理本」と「中京大本」を比較し、錯簡の調査がなされ、天理本は「校異源氏物語」稿本における底本であることが確認された。両本は書承関係である可能性が高いことがわかり、両本が河内本諸本の中での位置、派生時期・状況等の究明の必要性が提言された。

大津直子氏「谷崎源氏の誕生」は、谷崎が後半生取り組んだ「谷崎源氏工房」の実態と谷崎の理念「文学的翻訳」の創出について、どのような経過を辿り確立されようとしたかを調査し、論じたものである。谷崎源氏の「文学的翻訳」は、「外国文学の翻訳の悪影響にさらされる「今の青年」のために創出された文章芸術」と論証している。

畠山大二郎氏「古典文学における「衣更え」とその様相」は、『源氏物語』のみならず古典文学における「衣更え」の描写を取り上げ、年中行事としての形成の過程を示し、その意義を指摘する。『源氏物語』では、行事の「衣更え」と服喪の衣更えを組み合わせる表現も見られ、行事の描写の中に、心情を表出している状況を論じている。

論考の後に、針本正行氏、小菅あすか氏、亀谷粧子氏、高倉明樹子氏に拠る「國學院大學図書館蔵『源氏物語』「須麻」(零本一冊)」が資料紹介として掲載された。

17編の力のこもった論について、高野による紹介では意図からはずれたものがあつたであろうことを懸念する。ただこの17編を一気にとめて読み、得たものが非常に大きかったことを、今回書評の担当をさせていただいたものとしてお伝えしたくこの形式を採った。本書は、作品の「継承・発展」という意識に

焦点が置かれ、配列されている。右のように、各論文についてその意識をたどりながら、掲載の論文を読み終わると、そこには針本氏が目指された研究を具現化した論文集になったことが認められるのである。「継承・発展」を問うには、徹底した資料分析と、それをどのように捉えて論を組み立てていくかの強い問題意識がなければ、説得力のある論文にはならない。この『平安女流文学論攷』には、そうした意識があふれており、一冊の本を通して「平安女流文学」とは何かが示されたと見えよう。

(A5判上製、四四八頁、翰林書房、二〇二三年三月発行、
一二〇〇〇円＋税)